

【報告】

高校教員向け入試説明会の実践と評価

－対面とオンラインの特徴に関する分析－

林 如玉^{1)*}, 宮本友弘¹⁾, 久保沙織¹⁾, 倉元直樹¹⁾, 長濱裕幸¹⁾²⁾

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構, 2) 東北大学大学院理学研究科

2023（令和5）年5月8日に、新型コロナウイルス感染症に対する感染症法上の位置づけが「2類相当」から季節性インフルエンザと同等の「5類」へと移行した。各大学の入試広報活動も徐々に従前の対面形式に戻っている。東北大学での対面による入試広報活動も2023（令和5）年度から全面的に再開した。同時に、オンラインによる展開も継続している。本稿では、高校教員向けの入試説明会を取り上げ、オンラインと対面による実施状況をまとめ、事後アンケートの結果を分析し、ポストコロナ期における入試広報活動におけるオンラインと対面の適切な融合に向けて、現行の入試説明会における課題と改善点を検討した。オンライン、対面を問わず、現行の入試説明会は参加者から高い評価を受け、参加者の満足度も充分高いことが確認できた。オンラインと対面を比較して、現状では提供している情報が限られているという課題も示された。今後、対面形式の入試説明会の録画をオンデマンド配信するなど、さらに対面とオンラインの効果的な融合を工夫する可能性が示された。

1. はじめに

2020（令和2）年から3年間、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、各大学が対面で実施している入試広報活動は、中止あるいはオンラインでの実施に切り替えられた。2023（令和5）年5月8日に、新型コロナウイルス感染症に対する感染症法上の位置づけが「2類相当」から季節性インフルエンザと同等の「5類」へと移行した。その結果、各大学の入試広報活動も徐々に従前の対面形式に戻っている。

しかしながら、オンラインによる広報活動は遠隔地への移動が不要で、コストも対面による活動と比較して低いなど、利点がある。そのため、新たな広報活動の形式として、これからも継続されるであろう。2020（令和2）年7月に「東北大学ビジョン2030」をアップデートし策定された「コネクテッドユニバーシティ戦略」では、「オンラインを活用して国内外を対象とする高大接続プログラムやオープンキャンパス等を機動的展開」することが掲げられている（東北大学 2020: 3）。さらには、東北大学第4期中期目標・中期計画の「(1)-2 エビデンスに裏付けられた新たなアドミSSIONの展

開 (No.9)」では、「アドミSSION・ポリシーに合致した多様な学生を広く国内外から受け入れるため、オンラインと対面を融合した各種の高大接続プログラムを機動的に展開する」とある（東北大学 2022: 3）。なお、ここでいう融合とは、「オンラインと対面を併用する形態」を意味する（宮本ほか 2023: 100）。

東北大学ではこれまで、①高校訪問、②入試説明会、③進学説明会・相談会、④オープンキャンパスの4種類の入試広報活動を行ってきた（倉元ほか 2020: 57）。高校訪問以外の3つの活動については、2020（令和2）年度は、対面での実施はすべて中止となり、オンラインで実施することになった（倉元ほか 2022: 100；宮本ほか 2023: 99；久保 2022: 62）。2021（令和3）～2022（令和4）年度は、オンラインでの実施を継続しながら、参加人数に制限を加える等して、対面による実施を一部再開した。2023（令和5）年度は、引き続き、オンラインで実施しながら、2019（令和元）年度以前と同じ仕様で対面による実施を全面的に再開した。

入試広報活動の効果検証の一環として、東北大学では、2000（平成12）年度から、各年度の入学者を対象

*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内28 東北大学高度教養教育・学生支援機構 ruyu.lin.b2@tohoku.ac.jp
投稿資格：1

に、質問紙調査を行っている。その質問紙の中で、受験決定の際、重視した相談相手という項目がある。2020（令和2）年度の入学者全員に実施された質問紙調査の結果、「進路指導の先生」を重視する新入生の割合は39.6%で、最も多かった（宮本ほか 2022: 74）。この結果は最新の2023（令和5）年度の新入学者アンケートでも一貫している。つまり、高校生の東北大学への志望を促進するためには、高校の先生へのアプローチはきわめて重要である。そこで、本稿では、上記4つの入試広報活動のうち、高校の教員を対象とした「入試説明会」を取り上げる。

1.1 入試説明会について

2000（平成12）年度より開始された入試説明会は、当初、東北大学型の「学力重視のAO入試」を広くアピールする機会と位置付けられたが、現在は本学の学部入試全体の考え方を説明する機会として活用されている。コロナ禍以前は、入試センター教員が全国の複数の会場¹⁾（仙台会場を除く）に出向き、対面で実施されてきた。仙台会場については、入試センター教員に加えて、2007（平成19）年度からは各学部の教員が参加し、分科会方式で各学部の説明を行っている（倉元ほか 2020）。

先述した通り、2020（令和2）年度はコロナ禍により、対面での入試説明会は中止となり、オンラインで実施することとなった。入試センター教員が全国の複数の会場で実施してきた説明会を、ビデオ会議システム（Zoom ミーティング）に切り替えて実施した。実施単位をセッションと呼び、1セッションあたりの時間を60分、定員を20名とした（詳しくは、久保ほか 2021: 394-396）。2年目の2021（令和3）年度には、前年度の実施結果を踏まえて、実施時間帯を変更する等、実施仕様を改善した（詳しくは、久保・宮本 2022: 170-171）。そこで、オンライン入試説明会の実施方法はほぼ確定し、2022（令和4）年度は、それに従って実施した。2023（令和5）年度も同様であった。

なお、対面で行う入試説明会のうち、各学部の教員が参加する仙台会場は2021（令和3）年度に再開した。会場は、従来通り、仙台国際センターを使用し、当時の新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の対策に従って、定員制限（会場収容定員の50%）を設けた。2022（令

和4）年度は収容定員通りで実施したが、行動制限緩和のため事前申し込みを必須とした（詳しくは、宮本ほか 2023: 100-101）。2023（令和5）年度の仙台会場はコロナ前と同じ仕様で実施した。なお、高校教員向けの対面による入試広報活動としては、2022（令和4）年度から、高校との連携として、新しい形式「情報交換連絡会」という新たな取り組みを東北5県で開始した。（詳しくは、宮本ほか 2023: 102）。この活動も参加者からの肯定的な評価を受け、2023（令和5）年度まで継続している²⁾。

2020（令和2）年度以降、東北大学の入試説明会の実施状況をまとめたものとして、以下の三つがある。2020（令和2）年度から2021（令和3）年度の実施状況や事後アンケートの結果をまとめたのは久保・宮本（2022）、久保ほか（2021）である。これらの論文は主にオンライン形式の新しい展開に焦点を当てている。2022（令和4）年度について、宮本ほか（2023）ではオンラインと対面の両方の実施状況と事後アンケート結果をまとめたが、入試説明会だけに焦点を当てたものではなかった。

また、今までの事後アンケートは主に実施方法の適切性に焦点を当て、実施の効果に関する項目は限られていた。そこで、2023（令和5）年度は事後アンケートの項目を一部更新した。さらに、2023（令和5）年度はオンラインによる実施の4年目であり、かつ対面による実施を全面再開した初年度でもある。この時点で、2つの形式で実施された入試説明会の実施状況をまとめ、今後の実施に向けて、オンラインと対面を融合した展開方法を検討することは有益であると考えられる。

1.2 目的

本稿では、2023（令和5）年度入試説明会の実施状況をまとめ、事後アンケートの結果を分析し、ポストコロナ期における入試広報活動におけるオンラインと対面の適切な融合に向けて、現行の入試説明会における課題と改善点について検討する。

2. 対面の実施状況と評価

2.1 実施概要

2023（令和5）年度の入試説明会は、6月29日に、仙台国際センター（定員制限なし）で開催された。なお、事前申し込みを推奨したが、当日参加も可能であった。

当日は、13時から入試センター教員が約40分間、入試全体に関する説明を行った。その後は、4つの会場に分かれて、各学部の教員による講演が行われた。学部講演は質疑応答の時間を含めて1コマ35分であった。全学教育やキャリア支援に関する講演も行われた。途中退室等が可能であるため、参加者は自分の興味や関心に合った講演に自由に参加できた。また、個別相談ブースが設置され、入試センター教員が常駐した。さらに、各講演終了後には、各学部の講演担当教員も個別相談ブースで参加者の個別相談に対応した。

2.2 申込・参加状況

2023（令和5）年度入試説明会仙台会場の申込者数は222名で、当日の参加者数は231名であった。コロナ禍前の2019（令和元）年の参加者数は232名で、本年度はそれと同等水準に回復した。また、都道府県別の参加者数を見ると（図1）、宮城県が最も多く、次いで、岩手県、青森県、福島県、山形県、秋田県が続き、これら東北地方の6県からの参加者は86%を占めていた。

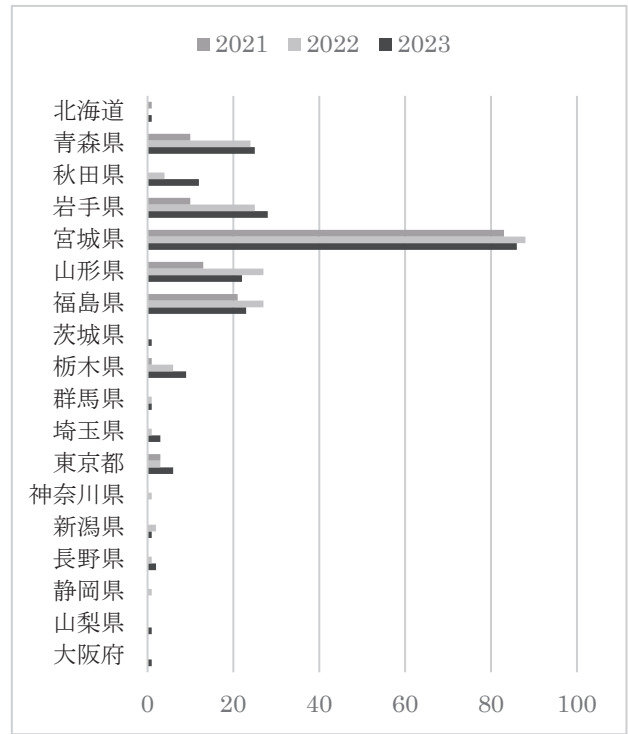


図1 都道府県別の参加者数（人）

2.3 アンケート結果

2023（令和5）年度の事後アンケートは、従来のア

ンケートと異なり、項目を変更した。具体的な項目は表1に示す。アンケート用紙を来場参加者の231名に配付した。調査票の冒頭に調査内容及び倫理的配慮を説明する文面を提示し、同意した者のみに回答を求めた。最終的に157名からの回答を得た、回答率は63.6%であった。なお、調査は東北大学高度教養教育・学生支援機構で倫理審査委員会の承認を得た。

表1 事後アンケートの項目（仙台会場）

Q1. あなたの学校について教えてください。 ・所在地_____・学校名_____
Q2. この入試説明会のことを何で知りましたか?（複数選択可） ①東北大学入試センターのウェブサイトで知った②東北大学からの郵送物（案内状）を見た③その他
Q3. 説明会の時期はいかがでしたか? ①ちょうど良い時期である②他の時期が良い（いつ頃がよいとお考えですか）
Q4. どの講演・個別相談に参加しましたか?（複数選択可）
Q5. 講演の内容はいかがでしたか? ①講演には参加しなかった②講演は参考になった ③講演は参考にならなかった
Q6. 個別相談はいかがでしたか? ①個別相談は利用しなかった②個別相談は参考になった ③個別相談は参考にならなかった
Q7. 入試説明会において、どのような情報を提供してほしいと思いますか?具体的に記述してください。（自由記述）
Q8. 他の教員にも東北大学の入試説明会を勧めたいと思いますか? ①非常にそう思う②そう思う③あまりそう思わない
Q9. 入試説明会に参加したことによって、生徒に東北大学への進学を勧めたいと思いますか? ①非常にそう思う②そう思う③あまりそう思わない
Q10. 入試説明会に関する意見や提案、改善点や追加すべき内容等があれば教えてください。（自由記述）

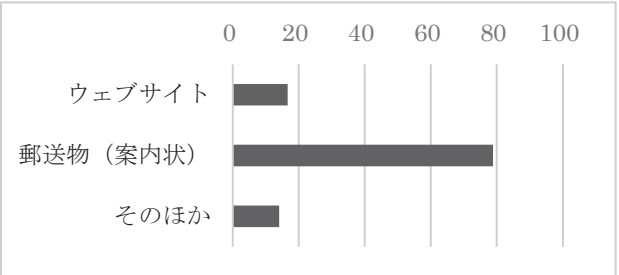


図2 Q2情報源（%）

Q2の情報源（図2）について、東北大学からの郵送物（案内状）を見た割合は78.8%で、ウェブサイトを通じて情報を入手した割合は16.7%であった。オンラインによる通知手段も有効だが、従来の案内状による通知手段も大きな役割を果たしていることが分かる。その他について、自由記述の回答をみると、「校内案内」「職場で」等が見られた。

Q3説明会の時期について、ほぼ全員（96.2%）が「ちょうど良い」という選択肢を選んだ。実施時期には重大な問題はないと考えられる。ほかの時期がよいという意見では、「6月上旬」「6月上旬～中旬でもよい」「もう1週間早いとよい」という記述が見られた。学部教員も参加するということもあり、実施側の負担を考えた上で、時期を大幅に前倒しすることは難しいであろう。

Q4の回答を図3に示した。9割近くの参加者が入試全体説明に参加した。次に、参加者数が多い順に、工学部、農学部、理学部、薬学部、法学部が挙げられる。

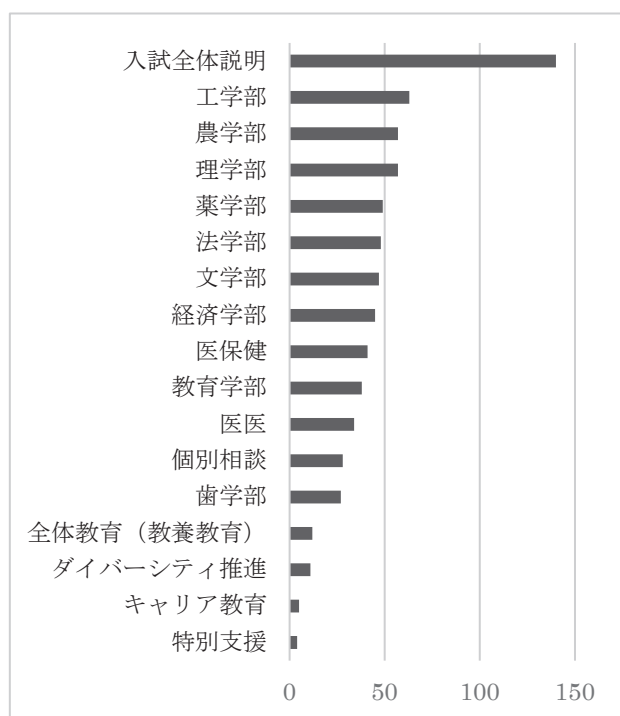


図3 Q4参加した講演・個別相談（人）

Q5講演内容に関する質問への回答（表2）は、「参考になった」を選択した割合は98.1%であった。Q6の個別相談に対する評価（表3）も、個別相談を利用した参加者の100%が「参考になった」と回答した。

表2 Q5講演内容

	度数	%
講演には参加しなかった	2	1.3
講演は参考になった	151	98.1
講演は参考にならなかった	1	0.6

表3 Q6個別相談

	度数	%
個別相談は利用しなかった	116	80.0
個別相談は参考になった	29	20.0
個別相談は参考にならなかった	0	0.0

Q8教員に東北大学の入試説明会を勧めたいかについては、「非常にそう思う」と「そう思う」の回答を合わせて98.7%であった（図4）。Q9生徒に東北大学への進学を勧めたいかという質問への回答も、肯定的な回答が100%であった（図5）。Q5～Q9の回答から、入試説明会仙台会場で行われている講演や個別相談は参加者にとって有益であり、さらに、この影響力は高校教員だけではなく、生徒にも正の影響を及ぼしていると言えるだろう。

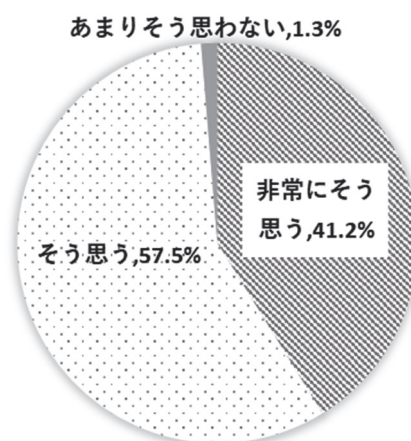


図4 Q8入試説明会を教員に勧めたい

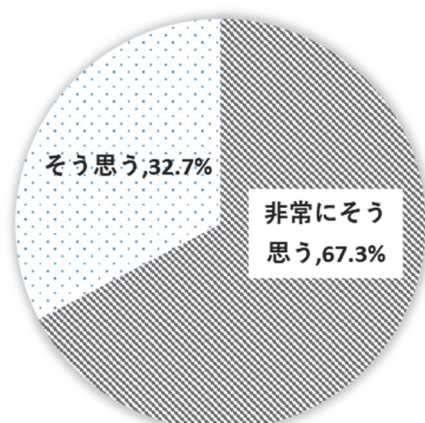


図5 Q9東北大学を生徒に勧めたい

次に、参加する学部講演の選択傾向によって、参加者の「参加パターン」を分類するため、Q4への回答を用いて、Ward法による階層的クラスター分析を行った。デンドログラムから、3つのクラスターに分類することが妥当と判断した。それぞれの特徴を図6に示す。

入試全体説明については、3つのグループすべてが積極的に参加した。「クラスター1」について、おもに、文・教育・法・経済学部の文系学部の講演に参加したため、「文系中心型」と命名した。「クラスター2」については、主に理・工・農学部の講演に参加したため、「理工系中心型」と命名した。最後に、「クラスター3」については、医学部医学科・保健学科・薬学部・歯学部を中心に参加したため、「医療系中心型」と命名した。

次に、「文系中心型」、「理工系中心型」、「医療系中心型」の3つの講演参加パターンによって、講演への評価（Q5）、入試説明会を教員に勧めたいか（Q8）、東北大学を生徒に勧めたいか（Q9）に差があるかを確認するため、それぞれの項目についてクロス集計表を作成してカイ2乗検定を行った。結果、どの参加パターンでも、入試説明会への満足度は高く、有意な差は見られなかった。

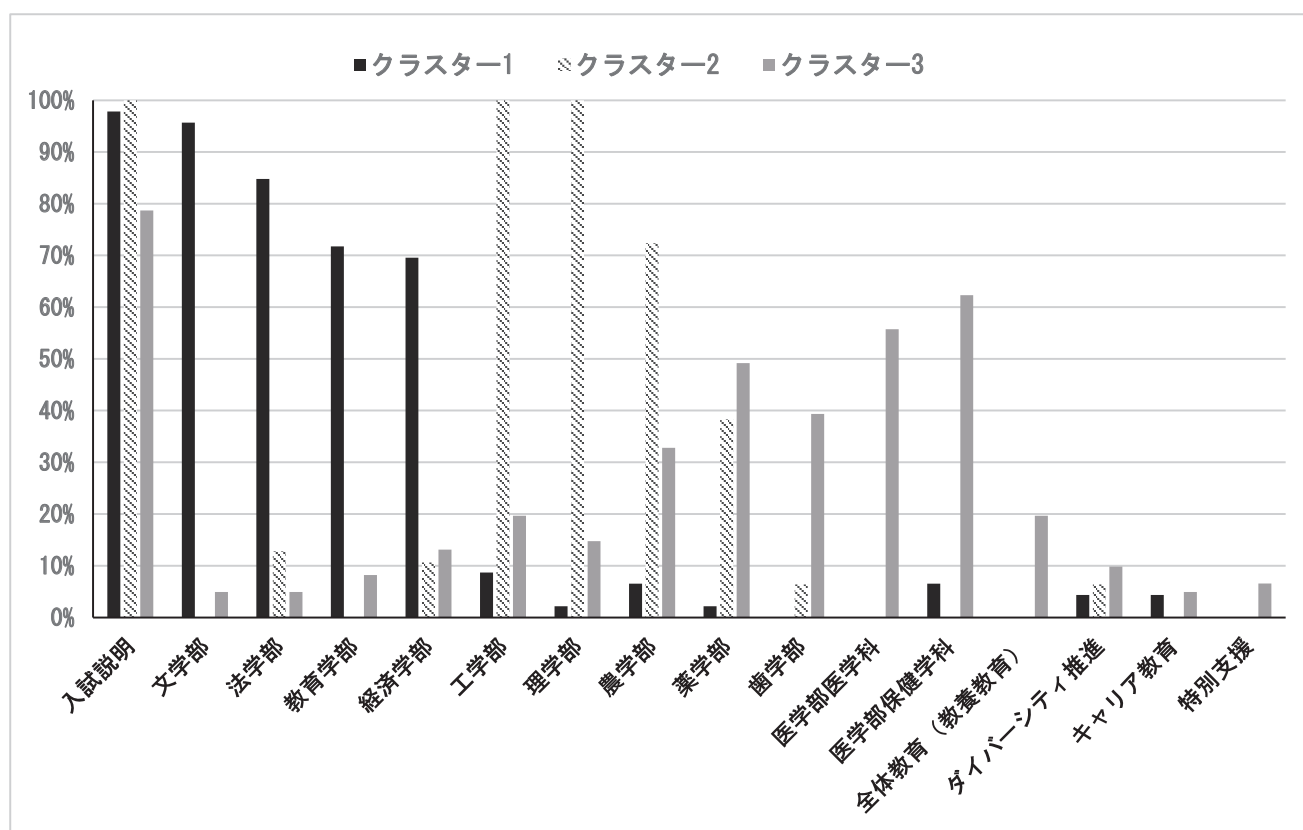


図6 講演参加パターン

3. オンラインの実施状況と評価

3.1 実施概要

2022（令和4）年度のオンライン入試説明会の事後アンケートの結果、実施時期・日程には重大な問題はないことが確認されている（宮本ほか 2023: 100-101）。それを踏まえて、2023（令和5）年度は2022（令和4）年度とほぼ同じ時期と日程で実施した。2023（令和5）年6月19日（月）～6月28日（水）に、各日①13:05～14:05、②15:30～16:30、③16:00～17:00の3回開催とした。質疑応答の時間を含めて1セッション60分、各セッションの定員は20とした。2023（令和5）年度も事前申し込み制であり、申し込みには大学情報センターが提供するシステムを利用し、説明会はZoomミーティングで行われた。

3.2 申込・参加状況

表4、2021（令和3）年度から2023（令和5）年度の申込・参加状況を示した。2023（令和5）年度の実施回数は24回だったが、参加者数は、18回実施した2022（令和4）年度とはほぼ変わらなかった。ただし、参加率は増加した。

表4 申込・参加状況

	実施回数	申込者数	参加者数	参加率
2021	18回	216名	174名	80.56%
2022	18回	119名	100名	84.03%
2023	24回	110名	105名	95.45%

各セッションの申込者数、参加者数、および充足率（定員に対する参加者の割合）をまとめ、表5に示した。また、実施時間について、参加者数が極端に少ない時間帯があるかを確認するため、実施時間別の参加者数を図7にまとめた。「②15:30～16:30」の時間帯において、参加者数は最高でも4人であり、定員20名に対する充足率が他の時間帯に比較して低かったことが分かる。来年度の実施に向けて、15:30～16:30の時間設定を再度検討する必要があると考えられる。

表5 実施日程および申込者数、参加者数

月日	実施時間	申込者数	参加者数	出席率(%)	充足率(%)
6月19日	①	6	6	100.0	30.0
	②	3	2	66.7	10.0
	③	13	12	92.3	60.0
6月20日	①	7	7	100.0	35.0
	②	2	2	100.0	10.0
	③	7	7	100.0	35.0
6月21日	①	9	8	88.9	40.0
	②	3	3	100.0	15.0
	③	4	6	150.0	30.0
6月22日	①	5	5	100.0	25.0
	②	4	4	100.0	20.0
	③	2	2	100.0	10.0
6月23日	①	4	4	100.0	20.0
	②	2	2	100.0	10.0
	③	2	2	100.0	10.0
6月26日	①	5	3	60.0	15.0
	②	4	4	100.0	20.0
	③	3	2	66.7	10.0
6月27日	①	5	4	80.0	20.0
	②	3	3	100.0	15.0
	③	6	6	100.0	30.0
6月28日	①	6	6	100.0	30.0
	②	4	4	100.0	20.0
	③	1	1	100.0	5.0

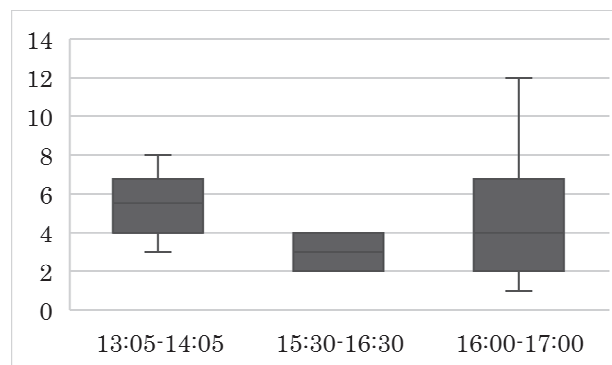


図7 時間別参加者数

また、地域別の申込者数（図8）を見ると、2021（令和3）年度から2022（令和4）年度の東北地方の減少幅が著しく大きかった。先述の通り、仙台会場の参加者のうち、86%は東北地域からであったことから、対面による仙台会場の再開が影響していると考えられる。一方、関東からの申込者数は、前年に比べてわずかながら増加した。中部・北陸地域の申込者数は減少傾向にある。同地域からの志願者数・入学者数は、東北地方、関東地方に次いで多く、16%程度を維持しているので、高校教員の本学に関する情報ニーズが大幅に低減しているとは考えにくい。オンライン入試説明会に参加しにくい何らかの理由があると考えられ、その究明は今後の課題である。

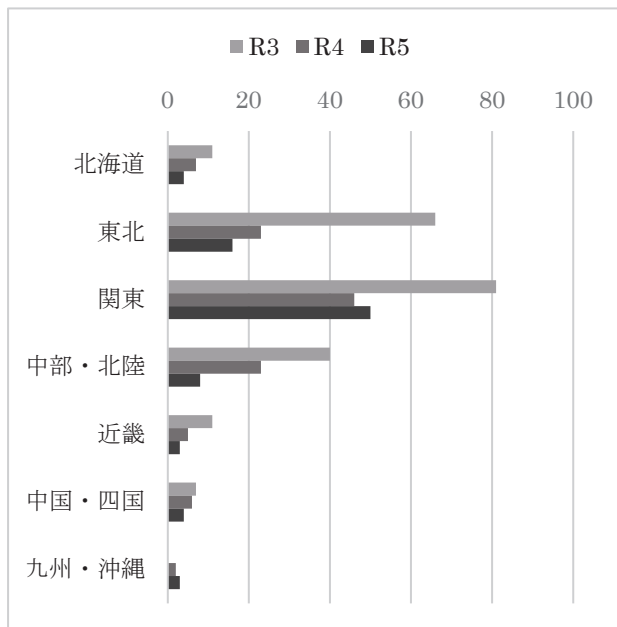


図8 地域別申込者数（人）

3.3 アンケート結果

2023（令和5）年度の事後アンケートは、従来のアンケートと異なり、項目を変更した。具体的な項目は表6に示す。オンライン入試説明会の参加者105名を対象に、Googleフォームを用いたウェブにおけるアンケート調査を行った。調査票の冒頭に調査内容及び倫理的配慮を説明する文面を提示し、同意した者のみに回答を求めた。最終的に88名からの回答を得た、回答率は83.8%であった。なお、調査は東北大学高度教養教育・学生支援機構で倫理審査委員会の承認を得た。

表6 事後アンケートの項目

Q1. 参加した説明会の日付を選択してください。
Q2. 参加した説明会の時間を選択してください。
Q3. あなたの学校について教えてください。 ・所在地____・学校名____
Q4. この入試説明会のことを何で知りましたか？ （複数選択可） ①東北大学入試センターのウェブサイトで知った②東北大学からの郵送物（案内状）を見た③その他
Q5. 入試説明会では、本学を目指している生徒への指導に役立つと思う情報は十分に提供されましたか？ ①十分である②おおむね十分である③やや不十分である④不十分である
Q6. 入試説明会において、どのような情報を提供してほしいと思いますか？具体的に記述してください。（自由記述）
Q7. 他の教員にも東北大学の入試説明会を勧めたいと思いますか？ ①非常にそう思う②そう思う③あまりそう思わない
Q8. 入試説明会に参加したことによって、生徒に東北大学への進学を勧めたいと思いますか？ ①非常にそう思う②そう思う③あまりそう思わない
Q9. 説明会の時期はいかがでしたか？ ①ちょうど良い時期である②他の時期が良い（いつ頃がよいとお考えですか）
Q10. 質疑応答の時間は十分でしたか？ ①短かすぎた②ちょうど良かった③長すぎた
Q11. 入試説明会に関する意見や提案、改善点や追加すべき内容等があれば教えてください。（自由記述）

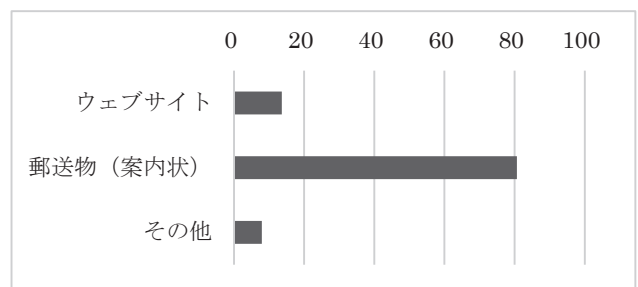


図9 Q4情報源（%）

Q4の情報源については、東北大学からの郵送物（案内状）が約8割を占め、ウェブサイトで説明会の情報を入手したのは1割強に過ぎなかった。この結果は、先述の仙台会場入試説明会の情報入手方法と同様であった。その他については、自由記述の回答では「進路部からの案内」「進路指導部長からの紹介」等が見られた。高校教員にとっては、郵送物が通知手段として有効であることが示唆され、次年度も案内状の郵送が必要である。

Q5本学を目指している生徒への指導に役立つと思う情報は十分に提供されたかという質問への回答（図10）は、「十分である」と「おおむね十分である」を合わせて98.9%であった。「やや不十分」を選択した者は1名いたが、ほしい情報に関する自由記述項目（Q6）をみると「どのような研究に力を入れているか?」という回答であった。入試だけの説明にとどまらず、時間の許す限り、本学の教育・研究等に関する特長についても触れることが望ましい。

Q7教員に東北大学の入試説明会を勧めたいかについては、「非常にそう思う」と「そう思う」の回答を合わせて97.7%であった。Q8生徒に東北大学への進学を勧めたいかという質問への回答も、肯定的な回答が98.9%であった。Q5～Q8の回答から、オンライン入試説明会が提供する情報は十分であり、進路指導に肯定的な影響を及ぼし、大学の生徒募集にも肯定的な影響を持つことが確認できた。総じて、参加者にとって高品質で、参加する価値のあるイベントと言えるだろう。

Q9説明会時期について、ほぼ全員が「ちょうど良い」という選択肢を選んだ（表7）。1人だけ「もう少し後の日程の設定があってほしい」という意見があった。

Q10質疑応答の時間については、9割以上の参加者が「ちょうど良かった」と回答した（表8）。これまで設定してきた実施時期・時間配分には重大な問題はないと考えられる。

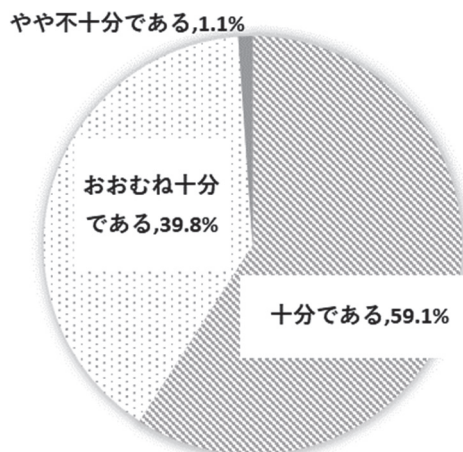


図10 Q5. 情報提供

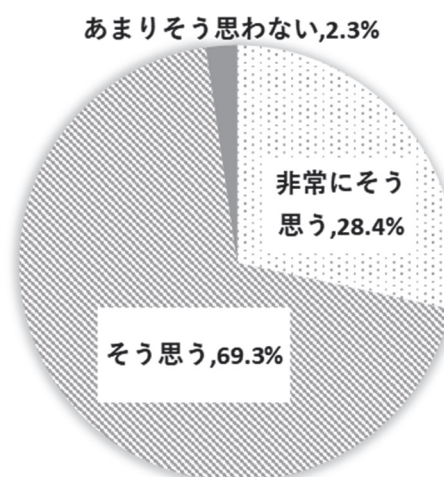


図11 Q7. 入試説明会を教員に勧めたい

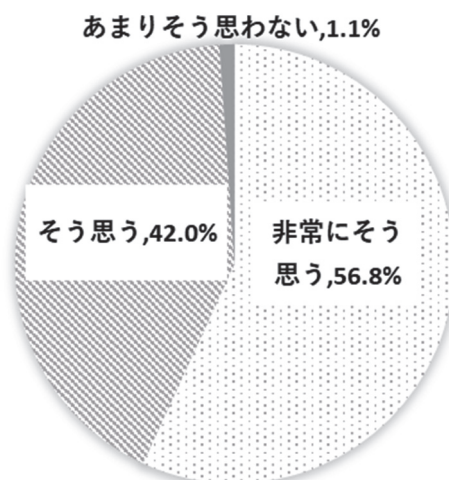


図12 Q8. 東北大学を生徒に勧めたい

表7 説明会の時期

	度数	%
ちょうど良い	87	98.9
他の時期が良い	1	1.1

表8 質疑応答の時間

	度数	%
短かすぎた	3	3.4
ちょうど良かった	81	93.1
長すぎた	3	3.4

4. 課題と改善策

本稿では2023（令和5）年度の高校教員向けの入試説明会について、オンラインと対面の両方による実施状況と事後アンケートの結果をまとめた。通知手段に関して、オンラインと対面の両方とも、郵送物の有効性が確認できた。そのため、今後の入試広報活動の通知手段として、オンラインによる通知を活用するとともに、郵送物を出すことが望ましいと考えられる。また、実施の時期や時間に関する項目では、事後アンケートの結果から、ほとんどの参加者が肯定的な評価をしたため、次年度以降の実施について大きく変更する必要はないと言えるだろう。ただし、事後アンケートは参加者を対象に行ったため、実施時間に不都合があるという回答は基本的に見られなかった。参加できなかった教員の意見も収集する必要はあるであろう。以下に、オンラインと対面それぞれの課題や改善点についてまとめる。

4.1 対面

入試説明会仙台会場について、講演の参加パターンは「文系中心型」、「理工系中心型」、「医療系中心型」に分かれたが、講演参加パターンによって、満足度に違いがあるわけではなかった。基本的に参加者は仙台会場の入試説明会に満足していることが検証できた。

入試説明会仙台会場に関する意見の自由記述では、感謝の意を表明する回答が多く見られた。また、課題

や今後の改善点に繋がるような回答は主に以下の3点に集約された。1点目として、「参加するメリット」についての要望がある。全体的に講演内容に対する評価が高かったが、参加者からは「ここだけで得られる情報」、「紙面上では見えない情報」など、説明会への参加価値を高める特別な情報への要望があった。この点に関しては、講演内容には、スライドに記載されている情報だけでなく、学部の担当教員しか提供できない学習の雰囲気や受験者像など、ここでしか聞けない情報を増やすことが有益であるかもしれない。

2点目は「学科の詳しい情報」の要望である。学部単位の入試情報の提供について評価が高かったと同時に、複数の学科を有する学部に関しては、学科の詳細情報に対する要望もあった。しかし、教員の負担等の制約を考えると、この要望に応えるのは現実的に難しいであろう。

3点目として、「個別相談」についての指摘である。個別相談は、学部教員と直接話す貴重な機会であり、対面による説明会への参加メリットの1つと考えられるが、参加者のコメントからは、個別相談の利用が難しかったことが明らかになった。その理由として、個別相談の利用方法や学部の先生が対応できる時間帯について、参加者に十分伝えられなかったことが挙げられる。来年度実施に向けて、個別相談への参加方法について、参加案内に明記するなど、参加者にもっと詳細に伝える必要があるだろう。

4.2 オンライン

オンライン入試説明会について、対面と同じく、参加者から高い評価がよせられた。また、説明が終わった後の質疑応答に対する評価も高かった。参加者からは「個別に質問できてよかった」というコメントもあった。

課題として、3.2で述べたように、実施回数は増加したが、参加者数はほぼ変わらなかったことが挙げられる。特に、充足率が極めて低い15:30～16:30の時間設定や全体的な実施回数には改善の余地があると考えられる。実施時間を再検討するか、または実施回数をニーズに合わせて効率化させていくかについては、今後検討する予定である。

また、オンライン入試説明会仙台会場の地域別参加

者数を対面と比較してみる（図13）と、オンライン説明会の参加者は主に関東などの遠隔地にいることが明らかとなった。近年、東北大学への志願者数・入学者数も関東出身者において増加傾向にあることから、高校教員の本学に対する情報ニーズも高まり、オンライン入試説明会への参加が動機づけられていると推察される。中部・北陸から東北大学への志願者・入学者も多かったが、入試説明会参加者数は減少傾向にある。東北大学の知名度は、地域によって差があるため、現状では参加者数を増やすことは難しいであろう。近畿、中国・四国や九州・沖縄などの地域からは、対面で入試説明会に参加した教員は1人もいなかったが、オンラインでは数少ないものの参加者がいた。参加者数が少ない中でも、ニーズに応えることが大切であり、このような状況では、オンラインによる説明会の実施は重要であることが確認された。

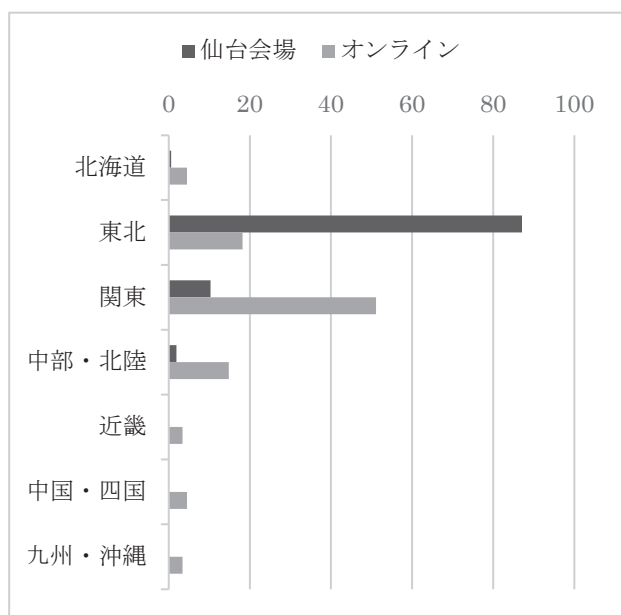


図13 地域別・方式別参加者数 (%)

オンライン参加者からの意見を見ると、対面と同様に、「ここだけの情報がほしい」という意見があった。また、学部の詳細に関する要望もあった。しかし、オンラインによる説明には限界がある。東北大学には10の学部があるが、オンライン入試説明会は入試センターの教員が担当しており、時間制限があるため、内容はどうしても入試全体に焦点が当てられている。全ての学部を説明することは現行の実施方法では難しい

であろう。

一方、対面による入試説明会は学部教員も担当しているため、学部の詳細情報はもちろん、個別相談でも豊富な情報が得られるような仕組みになっている。

ここで、ポストコロナ期における入試広報活動におけるオンラインと対面の効果的な融合という観点から、対面で行っている学部講演をビデオ収録し、オンデマンド配信する方法が考えられる。個別相談については、今まで入試説明会であった質問をQ&A資料として整理し、ネット上に公開するという方法も検討していきたい。

謝辞

本稿はJSPS科研費JP21H04409の助成を受けた。

注

- 1) 2019（令和元）年度には全国21都市を会場に実施された。
- 2) 「情報交換連絡会」の実施状況や詳細については別稿に譲りたい。

引用文献

- 久保沙織（2022）「オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開」, 倉元直樹・宮本友弘編『コロナ禍に挑む大学入試（1）緊急対応編』金子書房, pp. 60-81.
- 久保沙織・宮本友弘（2022）「オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価（2）」, 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第8号, pp. 169-176.
- 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘（2021）「オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価」, 『大学入試研究ジャーナル』第31号, pp. 394-400.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織（2022）「コロナ禍の下での大学入学者選抜をふり返る―主として2021（令和3）年度入試に関連して―」, 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第8号, pp. 95-107.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉（2020）「東北大学における入試広報活動の「これまで」と「これから」―一頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ―」, 『教育情報学研究』第19号, pp. 55-69.

宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸（2022）「東北大学志望を促進する要因の検討—新入学者アンケートから—」, 『大学入試研究ジャーナル』 第32号, pp. 69-76.

宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸（2023）「オンラインと対面を融合した入試広報活動の展開—2022（令和4）年度取り組みを中心に—」, 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』 第9号, pp. 99-110.

東北大学（2020）「東北大学ビジョン2030（アップデート版）」, https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/newsimg/news20200729_00.pdf（閲覧2022/10/13）.

東北大学（2022）「国立大学法人東北大学 第4期中期計画」, <https://www.bureau.tohoku.ac.jp/kohyo/kicho/chukikeikaku2022.pdf>（閲覧2022/12/23）.

